

トマスの存在理解をめぐる上枝氏の提題に寄せて

萩原 理

1 「不整合が生じる恐れ」を取り除く

1-1 上枝氏から超-上枝氏へ、そして再び上枝氏へ

ご提題「トマスの神はエッセのアイデアか」で上枝美典氏は、トマスのなかにプラトニズムの「要素が混入することによって、理論内部に不整合が生じる恐れがある」と主張される（本号所収上枝 序最終文）。

「不整合が生じている」と断言されていれば話はより単純だったろうが、「生じる恐れがある」と慎重な言い方をされているため、氏のご主張の内容を特定するにはしかるべき手順を踏む必要がある。

次のようにしたい。トマスの理論内部にその不整合が「生じる恐れがある」と氏が言われるその不整合、これがそこに生じていると、氏のより大胆な分身（これを「超-上枝氏」と呼ぶ）が断言しているものと想定しよう。そしてまず、超-上枝氏の主張を説明しよう。それから超-上枝氏と、より慎重な上枝氏との違いを示して、可能世界から現実に戻ることにしたい。

超-上枝氏によれば、問題の不整合はトマスについての次の二つの事実の間に生じている。第一に、トマスは“存在そのもの (ipsum esse) がある”と主張している、という事実。第二に、アリストテレスは、“存在そのもの (αὐτὸ ὄν, ipsum ens) があるなら、それ以外に何もあり得ない”と考えており、アリストテレス主義者たるトマスはこの考えを受け入れている、という事実。これらの事実の間に不整合が生じるのは次のようにしてである。第一の事実は次のことを含意する。すなわち、“存在そのものがあるなら、それ以外に何もあり得ない”というアリストテレスの考え、を成す条件文の前件（存在そのものがある）にトマスがコミットすることを¹⁾。だが modus ponens により、条件文およびその前件にコミットする

1) “esse と ens は異なるのに、このように論じ進めてよいのか”と思われるかもし

者は、論理的に整合的である限り、条件文の後件にもコミットするはずだ。だから、アリストテレスのその考えと、これを成す条件文の前件とにコミットするトマスは、論理的に整合的である限り、その条件文の後件（存在そのもの以外に何もあり得ない）にコミットするはずだ。ところが実際にはトマスは、“存在そのもの以外に何もあり得ない”との主張にコミットしない。トマスにとって存在そのものとは神であり²⁾、トマスは神以外にも何か（すなわち被造物が）あると考えるので。これが、超-上枝氏がトマスの体系内部に認める不整合である。

トマス理論に不整合ありと主張する超-上枝氏が“事実”として前提する以上二つのことのうち第二のもの——すなわち、アリストテレスは“存在そのものがあるなら、それ以外に何もあり得ない”と考えており、アリストテレス主義者たるトマスはこの考えを受け入れている、ということ——を、上枝氏はそのままの形では認められないだろう。これを上枝氏はより慎重に、次のように言い直されるだろう。すなわち、アリストテレスは“存在そのものがあるなら、それ以外の何もあり得ないことになりはしないか”と「危惧」³⁾しており、アリストテレス主義者たるトマスはこの危惧を共有している⁴⁾、あるいは共有してしかるべきだ⁵⁾、と。それで、トマスの理論内部に生じていると超-上枝氏が断言する不整合について上枝氏はより慎重に、それは「生じる恐れがある」と言われるのだ。

れないが、よいと思われる。‘ipsum esse’ はトマス自身の理論の用語で、‘ipsum ens’ は（すぐ後に見る）アリストテレス『形而上学』第3巻第4章の箇所における ‘αὐτὸ ὄν’ のラテン語訳だが、いずれも〈ある〉を自体者として措定したものを指す。如果说えば、アリストテレス式の哲学的諸見解概観の文脈で ‘ipsum ens’ と呼び得るもの、の特殊トマス版（トマスの解する真正キリスト教版）が ‘ipsum esse’ だと言えるかもしれない。その場合、“ipsum esse がある”というトマスの主張は “ipsum ens がある” という主張を含意すると言える。

2) 前注の ens と esse の区別を踏まえて丁寧に書き出せば、ここは「トマスにとって ipsum esse とは神であり、したがって彼にとっての ipsum ens とは神であり」となる。

3) 「危惧」の語は上枝 第1節（節題、本文）、第4節（第1, 2, 4段落）に（いずれも主語はアリストテレス）、動詞「恐れる」は第1節、第3節（第3段落）、第5節（第1段落、最終段落）に（いずれも主語はアリストテレス）、「バルメニデスの脅威」は第1節、第4節（第4, 5段落）、第5節（第1段落）にある。

4) 上枝 第4節第2段落。

5) 上枝 第2節最後から第4の段落、第3節最後から第3の段落、第5節は上枝氏がこうお考えのようだと示唆する。

1-2 『形而上学』解釈で上枝氏に挑む

つまり上枝氏は、トマスの理論内部に不整合が生じる恐れがあると主張される際の前提の一つとして、次のように考えておられる。すなわち、アリストテレスは“存在そのものがあるなら、それ以外の何もあり得ないことになりはしないか”と危惧しており、アリストテレス主義者たるトマスはこの危惧を共有している、あるいは共有してしかるべきだ、と。このお考えは正しいか。以下でこの点を検討したい。ここ1-2では、トマスはアリストテレスの危惧を共有している、とお考えになる場合を、次の1-3では、トマスはアリストテレスの危惧を共有してしかるべきだ、とお考えになる場合を検討する（これら二つの場合は排他的ではない）。

アリストテレスは“存在そのものがあるなら、それ以外の何もあり得ないことになりはしないか”と危惧している、とお考えになる典拠として上枝氏が引かれるのは、『形而上学』第3巻第4章1001a29-b1である（上枝 第1節）。拙訳を掲げる。

しかしながら、もし存在そのものや一そのものがあるとするなら、次の大きな難問が生じる。すなわち、どうしてこれら〔存在そのもの、一そのもの〕以外に、〔これらと〕異なるものがあることになろうか、という難問が。これはつまり、存在するものがどうして一つより多くあることになろうか、ということだ。つまりこういうことだ。存在と異なるものはあらぬ。したがって、パルメニデスの論によれば、“すべて存在するものは一つであり、それは〔かの〕存在である”ということが帰結するのは必然だ、というのだ。

*ἀλλὰ μὴν εἴ γ' ἔσται τι αὐτὸ ὄν καὶ αὐτὸ ἓν, πολλὰ ἀπορία πῶς ἔσται τι παρὰ ταῦτα ἕτερον, λέγω δὲ πῶς ἔσται πλείω ἐνὸς τὰ ὄντα. τὸ γὰρ ἕτερον τοῦ ὄντος οὐκ ἔστιν, ὥστε κατὰ τὸν Παρμενίδου συμβαίνειν ἀνάγκη λόγον εἶναι ἅπαντα εἶναι τὰ ὄντα καὶ τοῦτο εἶναι τὸ ὄν.*⁶⁾

6) ラテン語旧訳：At vero si erit aliquid ens ipsum et ipsum unum, multa erat dubitatio quomodo erat diversum aliquod praeter haec. Dico autem, quomodo erunt uno plura entia? Quod enim diversum est ab ente, non est. Quare secundum Parmenidis rationem accidere necesse est, unum omnia esse entia at hoc esse ens.

新訳：At vero si quid erit ipsum ens et ipsum unum, magna dubitatio est, quonam modo aliquid aliud praeter haec erit: dico autem, quomodo entia erunt plura uno. Quod enim aliud ab ente est non est. Quare secundum Parmenidis rationem, necesse est accidere omnia entia esse unum, at hoc est ens.

ここで確かにアリストテレスは、存在そのものがあるなら、“それ以外のものがどうしてあり得るか”という「大きな難問が生じる」と言っている。ここの文言を上枝氏は、“存在そのものがあるなら、それ以外の何もあり得ないことになりはしないか”とのアリストテレスの危惧を表わすものと解される（そう解される場合その危惧は、“存在そのものがあると主張するなら、パルメニデスのような一元論にコミットする破目⁷⁾に陥りはしないか”という危惧とも言い換えられよう）。そのご解釈は正しいか。また、トマスは『形而上学』のこの文言をどう解したか。

私は次のように考える。『形而上学』1001a29-b1でアリストテレスは彼自身の危惧を表わしてはならず、むしろ、存在そのものがあると主張する場合に生じ得る難問の一つ——パルメニデスの論によるもの——をたんに紹介しているに過ぎない。そしてトマスもアリストテレスの意図をそのように解している、と。以下で、そう考える理由を述べる。

手始めに、『形而上学』第3巻の全般的な性格に触れておく。そこでアリストテレスは哲学的諸問題について次々難問を提起する。多くの問題について、定立・反定立双方の立場を紹介し、双方に対する難問を掲げる（例えば1001a29-b1は、存在そのもの、一そのものがあるとする側に対して提起される難問の一つであり、他方の側に対してもやはり難問が提起される）。アリストテレスは第3巻で提起した難問の多くに、『形而上学』のより後の諸巻で解決を与えているとしばしば解され（トマスもそう解しており⁸⁾）、これは『形而上学』の一つの適切な読み方だと思う。ともあれ、第3巻中で「どうして……か」という形の「大きな難問」が提起されたからといって、“どうして……か、説明できないのではないか”とアリストテレス自身が危惧していると決めつけてはなるまい。なぜなら、アリストテレスにはすでにその難問の解決法がわかっているのかも、あるいは、解決の目途がついているのかもしれないのだから（その場合、「大きな難問」が「大きい」とされるのは、解決困難という意味ではなく、解決できない場合に大変な事態になるという意味であろう）。第3巻中の特定の難問に対するアリストテレスの態度は、著作群全体から浮かび上がる彼の立場に照らして読み取られるべきであろう。

さて、『形而上学』1001a29-b1のテキストで、“存在そのものがあるな

7) 上枝氏は「パルメニデスの餌食」という印象的な表現も使っておられる（第1節）。

8) 『『形而上学』注解』第3巻第1課注解参照。

ら、それ以外のものがどうしてあり得るかという大きな難問が生じる”とされるのは、「パルメニデスの論によれば」のことである。パルメニデスの論は、“オン（エンス）と異なるものは、あらぬ”という前提から、“オンという一つのものしか存在しない”という一元論を結論として導き出すものだ。

この議論はあからさまな詭弁である。「オン」の意味を二通りに解する余地があるが、いずれにせよ議論は妥当でない。すなわち一方で、「オン」を「存在するものどもの集合」というほどの意味に解し得る。この場合、“オンと異なるものは、あらぬ”という前提は、“存在するものどもの集合に属さないものは、存在しない”という意味になり、真である。だが、前提の「オン」をこの意味に解するのなら、そして議論を *non sequitur* にしないために、結論の「オン」も同じ意味に解するのなら、“オンという一つのものしか存在しない”という結論は、“存在するものはすべて、存在するものどもの集合という一つの集合に属する”というような自明の理を言うにすぎず、いわゆる一元論の主張ではなくなるだろう。他方で、「オン」を「存在そのもの」（という独特な存在者）の意味に解し得る。確かにこの場合、“オンという一つのものしか存在しない”という結論は一元論の主張を意味する。だが、結論の「オン」をこの意味に解するのなら、そして議論を *non sequitur* にしないために、前提の「オン」も同じ意味に解するのなら、“オンと異なるものは、あらぬ”という前提は、（議論のまさに結論である一元論を採らない限り）受け入れがたい。このように、「オン」をいずれの意味で解するにせよ、パルメニデスの論は、一元論を支持する妥当な議論とはみなし得ない（次の 1-3 でも関連する点に触れる）。

さて私は、アリストテレスもこの議論を（一元論を証明するものとしては）詭弁とみなしただろうと考える。なぜならあからさまな詭弁だからである⁹⁾。したがって私は、『形而上学』1001a29-b1 でアリストテレスは、“存在そのものがあるなら、それ以外の何もないことになりはしないか”と危惧してはいないと思う。

また私は、トマスもこの議論を詭弁とみなしただろうと考える。ここで理由はやはり、あからさまな詭弁だからというものだ。したがってトマ

9) 『自然学』第1巻第2-3章でアリストテレスは、パルメニデスとメリッソスは小理屈をこねている、彼らを論駁するのは難しくないと、言う。

ス自身、問題の「危惧」を持たなかつただろうと考える。そして、“アリストテレスはその議論を詭弁だとみなしただろう”とトマスが考えただろう、と推測する。つまり、“アリストテレスは問題の危惧を抱いている”とはトマスは考えなかつた、と私は思う。

最後の点について、トマスの『『形而上学』注解』から傍証を挙げたい。そこでトマスは『形而上学』第3巻を15の部分(15課)に区切る。第3課以降、各課の注解の最後にトマスは、アリストテレスが、自らがそこで提起した難問を『形而上学』の後の諸巻のどこで解決しているかを記す。われわれの箇所は第12課の分(1001a4-b25)に含まれる。その注解の最後でもやはり、提起された諸難問がどこで解決されるかをトマスは記す。その最初に言われるのは次のことだ。

すなわち、〈一・存在そのものである離在する何か〉があるということ〔アリストテレスは〕以下の第12巻で論証することになる。次のような第一原理——すなわち、完全に離在するが、しかし、(プラトン主義者たちが考えたような)一であるすべてのものどもの実体ではなく、すべてのものどもの一性の原因にして原理である第一原理——が単一であることを示すことによって、その論証を行なうのである。

Quod enim sit aliquod separatum, quod sit ipsum unum et ens, infra duodecimo probabit, ostendens unitatem primi principii omnino separati, quod tamen non est substantia omnium eorum quae sunt unum, sicut Platonicus putabant, sed est omnibus unitatis causa et principium.

いま、アリストテレスは、“存在そのものがあるなら、それ以外の何もないことになりはしないか”という仮言的な危惧を持っていた、とトマスが考えていた、と想定しよう。その場合——上の引用からわかるように、“アリストテレスは存在そのものがあると考え”とトマスはみなしており、危惧内容をなす条件文の前件が満たされるのだから——アリストテレスは“存在そのもの以外の何もあり得ないことになりはしないか”と(仮定のクッションなしに、まさに)危惧していると、トマスが考えていることになろう。だがトマスは『『形而上学』注解』で、“アリストテレスはそのような危惧にさいなまれている”とか、“さいなまれるはずだ”と見な

すそぶりを一切示していない。むしろ、関連する点について哲学者が言うことの整合性を（おそらくは真理性さえ）信頼しつつ筆を進めているように思われる。ゆえに上記の想定は疑わしい。

1-3 アリストテレス抜きで上枝氏に挑む

さて、上枝氏は次のようにお考えかもしれない。すなわち、アリストテレスが“存在そのものがあるなら、それ以外の何もあり得ないことになりはしないか”と危惧しているようがいまいが、また、トマスがアリストテレスをどう解しているかが、次の命題、すなわち、存在そのものがあるなら、それ以外の何もあり得ないことになりはしないかと危惧してしかるべきである、という命題は事柄として真である。だからトマスは、一方では、存在（エッセ）そのものがあると主張しており、また他方で、存在そのものだけでなく被造物の存在も認めている限り、理論内部に不整合を抱え込む恐れがある（トマスの自覚の有無にかかわらず）、と。

だがそうだとすると、“存在そのものがあるなら、それ以外の何もあり得ないことになりはしないかと危惧してしかるべきである”という命題を上枝氏はどう支持されるか。『形而上学』第3巻第4章の箇所ではアリストテレスが紹介するパルメニデスの論は、この命題を事実上支持しようとするものと見なし得るが、先に見たように、これは詭弁にすぎないと私には思われる。そして、その命題を支持する、その論よりも有望な方法を私は思いつかない。

上枝氏は第4節第5段落で「パルメニデスの脅威」を次のように説明される。

パルメニデスの脅威は、「存在する」という属性を、領域内のすべての個体を含む属性として認めると、その観点から見ると、領域内に区別を導入できなくなる、ということである。すべては「存在する」という属性に包含されるので、その観点から、万物は一であることになり、さらに、「存在しないもの」は議論の領域から排除されるため、その一なるものは、「不生・不滅・独り子・全体・不揺・完全無欠」（納富 2011, p.63）だということになる。

私はこれを妥当な議論として解することができず、詭弁ではないかと疑う。「存在する」という属性を、領域内のすべての個体を含む属性として

認めると、その観点から見ると、領域内に区別を導入できなくなる」、「すべては「存在する」という属性に包含されるので、万物は一であることにな〔る〕」とは、「存在するものはすべて、「存在する」という点に関しては同じであり、その限り一つである」という意味ではないかと思われる（それなら理解できる。そして他の解し方は思いつかない）。だがその場合、そこで言われていることはトリヴィアルに真であり、パルメニデスの逆説的な一元論を帰結しない。「存在するかしないか」という点では区別できないものどもが、他の観点から区別されても一向に構わず、何でもあれどもかく何らかの仕方、複数のものが相互から区別されさえすれば、パルメニデスの一元論は成立しないからだ。それとも、パルメニデスの一元論を「存在するものはすべて、「存在する」という点に関しては同じであり、その意味で一つである」というだけのことをいうものと解釈すべきだというのだろうか。ならばこの意味での一元論は、「世界には多数のものがある」とする多元論と両立するおとなしい主張にすぎず、通常「一元論」という語で理解されるものとまったく異なる。そんな無害なものを恐れる必要はなからう。¹⁰⁾

トマスにも見られる、「存在そのもの」を指定する思考を上枝氏は疑問視ないし否定されるのかもしれない。そうだとすると、そのお立場は理解できる。だが、「存在そのもの」の指定を批判されるにしても、「その指定はパルメニデスの一元論を帰結してしまうのでは、と危惧される」との前提に立ってそうされるのは得策でないと思われる。いま見たように、その前提は怪しいからだ。

2 トマスをどう救おうとされるべきでないか

ご提題で上枝氏は、まず、「存在そのもの」を指定するなら、一元論が帰結するのではと危惧される」と前提した上で、第4、5節で、トマスのエッセを自体者ではないと解する手立てを二つほど提案される。一つは、エッセを世界の「現実様相」と解するという刺激的なご提案（第4節）、もう一つは、自存するエッセそれ自体が神の本質であるとの命題は「トマ

10) 上枝 注17で言及される論文で Wipfel は、トマスがパルメニデスの脅威をどう受け止めたかに触れる (pp. 578-9, 590)。上枝氏もこれに触れられる。だが両解釈の間には決定的な相違がある。Wipfel が、トマスはパルメニデスの脅威に対処する術を心得ていると見るのに対し、上枝氏は、トマスは結局のところその脅威にさらされたままだと論じられるのだ。私が信じ難く思うのは後者の主張である。

スにおいて、直接的に把握される事実ではなく、いわば、理論上、極限的に要請された命題である」とのご提案（第5節第5段落）¹¹⁾だ。上枝氏はこれらのご提案を、“次々押し寄せる攻撃の波をトマスはどこまでかわせるか”というストーリーの中で出される。その意味で、それらのご提案は、（暫定的にはあれ）トマスを救おうとするお試みと受け取ることができるように思う（最後には、それでもトマスは逃げ切れまい、と宣告されるのだけれども〔上枝 最終段落〕）。

しかし、「存在そのもの」の措定は、その正誤はおくとして、トマスの体系にとってまぎれもなく根本的だと思われる¹²⁾。だから、たとえ暫定的にであれそのように（すなわち、“トマスは自体者たるエッセを措定していないかもしれない”とまで提案して）トマスを救おうと企てられること自体、あまりに外的なスタンスからトマスに接近するご所作のように思われる。“苦しい一人芝居”のように映じてしまわないか、危惧される。

3 トマスとイデア論——リーゼンフーバー氏からの引用

トマスとイデア論の関係について少し触れたい。私はクラウス・リーゼンフーバー氏の「分有と存在理解——トマス・アクィナスの形而上学において——」（『中世における自由と超越』〔創文社、1988年〕所収、酒井一郎訳）から多くを学んだ。そして他の二次文献についても、何よりトマスのテキストについても、勉強を怠ってきた（お詫びする）。せめて、リー

11) この点について、リーゼンフーバー氏の「神認識の構造——トマス・アクィナスの神名論において」（『中世における自由と超越』所収。『中世思想研究』第21号掲載版の本間英世訳を高尾由子が改訳）より引用させて頂く。

たしかにトマスも彼の神論全体を、人間は神が存在することを認識できるが、しかし、神が何であるかを認識することはできない、という原則で貫いており [2]、この点では、否定神学と軌を一にしている。しかしトマスが人間にとって神の本質が認識不可能であり、歴史的啓示によってもそれが可能にされることはない [3] と言うとき、彼はそれを遺漏のない十全な認識という意味で理解しており、そのような認識の不可能性は類比的な本性認識の可能性と相容れないものではない [4]。トマスが珍しくも純粋な否定神学にたいして加えた率直な批判において行った根本的な修正とは、神は、原因性の道によっては、偽ディオニュシオスの言ったような有限的な完全性のそれ自身は認識されえない原因 (causa) としてだけでなく、たとえ不完全であるにしろ、神自身の存在様態 (substantialiter) において肯定的に認識され、記述されるという点である。(pp. 522-3)

注 [4] は S. th. I q. 12 a. 12 c.

12) 神は自存するエッセそのものだとするトマスの諸箇所を上枝氏自身上枝注 11 で引いておられる。S. th. I q. 6 a. 4 c も参照。

ゼンファー氏の、有機的連関をなして豊かに展開する同論文から、ごく一部を恣意的に摘記することをお許し頂きたい。

[1] ところでトマスは、プラトンがイデア論において誤ったのは、存在の秩序と認識の秩序とが完全に対応していることを前提したためであり [69]、それゆえに抽象的な概念の多数性に対応して、相互に異なり各自に自存しているイデアが多数存在する [70] という結論に至ったのだろう、とさまざまな仕方で論及している [71]。……これにたいしトマスは、認識者によって認識されるものは認識者の把握の仕方に依じて受け取られる……のであると述べる [72] (pp. 482-3)。

[2] ……トマス……は、多くのものは自らに先立って自存する同一的なものに与ることによってのみ、互いに類似して存在しうる、というプラトンの根本洞察を認める [75] (p. 483)。

[75]: *S. th.* I q. 6 a. 4 c; *In de div. nom.*, prooemium IIa.

[3] ところでこの万物による一なる第一のものの超範疇的、つまり存在論的・超越的な分有については、トマスが強調しているように、すでにプラトン自身善の概念をめぐって主題的に考察しており、そこからトマスは、……アリストテレスをプラトンの的に解釈し、このような分有をアリストテレスも認めているかのようにみなしている [81]。トマスはしたがってプラトンの分有論やイデア論それ自体に原理的に異を唱えたというより、むしろそれらの核心をなす洞察にはまったく賛成するのであるが、そこから帰結された自立自存するイデアの多数性という主張だけにたいし、あらゆる分有を直接に唯一の始源的原理へと遡らせることによって反論している [82]。神とはそのためトマスにとっては、プラトンの的に言うと、唯一の「離存形相 [83]」であるが、その点でトマスは、「プラトンの言辞を用い [84]」ながらも原理はただ一つで諸々のいかなる純粹完全性もそこから離れては自存しえない [85] 神それ自身にほかならないとする、偽ディオニュシオスの見解 [86] に従っている (p. 485)。

[82]: *S. th.* I q. 6 a. 4 c; *Ver.* q. 12 a. 4 c.

[83]: *In de Causis* l. 10 n. 241.

[84]: “plerumque utitur stilo et modo loquendi quo trebantur

platonici, qui apud modernos est inconsuetus.”: *In de div. nom.*, prooemium IIa.

[85]: *In de div. nom.* c. 11 l. 4 n. 931-933; *ib.* c. 5 l. 1 n. 613; *ib.* n. 634.

[86]: *In de div. nom.* c. 1 l. 3 n. 100; *ib.* prooemium IIa.

確認したいのは、トマスはイデア論の問題点を指摘する一方で、その核心をなす洞察には賛成し、これを神についての思索に活かしているということだ。

存在そのものをめぐるトマスの説には、私に理解できないところがある。だがその不可解さは多くの場合、私が神を信じないことと結びついているように思われる。いまだ管見の及ぶかぎり、不整合は見当たらない。